スリーマイル島事故の真相

森　一久

世界の原子力発電所の安全記録が今回のアメリカ。ペンシルバニア州のスリー・マイル原発二号の事故で破れ、原子力発電所への信頼が揺らいでいることは全く残念というほかない。しかしながら、初めてのことで情報が混乱したのも止むをえないとはいえ、事の真相がわかるにつれ、意外なことがあまりにも多すぎるというのが実感である。

まず事故影響の大きさについて事故から一週間たつた今日米原子力規制委員会（NRC）の発表によると、今回の事故で周囲に放出された放射性ヨウ素（人間健康上最も重大なもの）は一キュリー（因みに一九五七年ウインズケール事故では二〇、〇〇〇キュリー放出）、周囲の農場で採取された牛乳中のヨウ素は一リットル中一〇ー二〇ピコキュリーで、不飲用基準の六百分の一、中国の核兵器実験時の一〇分の一。今回の事故時に最も放射能が多く

通つた東北地点で五日間昼夜戸外に立ちつくしたとしてもその人の受けた放射線は八〇ミリレムで自然放射能の一年分以下。今頃になつてこんな低い値が示されたのでは、一体これは何のための退避の措置や予告だつたのか。何のための騒ぎだつたのか、だまされたような気分になつてしまう。ではなぜそんなことになつたのか。

その根本にこの発電所に対するNRCや米行政当局の先入観があるようだ。「事故が起きたのが午前四時、にもかかわらずNRCが報告を受けたのは（すべてが終つた）七時四十五分」と不信感を隠さない言葉で始まるNRCの報告には幾つかの背景がある。まずこの発電所は驚いたことにすでに昨年の半年間の試運転中に二度もECCS（緊急炉心冷却装置）が作動している。（因みに日本ではすべての原発で未だかつて一度もそのような事態が起きたことはない。）事故当時の全出力運転時にこともあろうに重要な補助ポンプの修繕をやつていた！。。。。。。

「あそこなら何をやるか判らない。」という強い懸念が米規制当局等の発表のすべてに一貫してみなぎつている。四月一日現場を訪問したカーター大

統領も「事故は鎮静しつつある。だが、まだ六十万人が退避を迫られる可能性もある。」と述べたように、この一週間の新聞を読み返してみると、当局の発表文はすべて判で押したように、「・・・は改善されつつある。だがもつと大変なことになるかもしれない。」という同じムード。これでは大衆や衛生当局が不安をかきたてられたのはむしろ当然といわねばならない。

スリーマイル原発が同じ加圧水型ながら日本で運転中のものと違つているのは、単なるメーカーの相違のような単純なことではないようだ。紙数の関係ですべてを挙げることはできないが、①二次冷却系統が空気作動弁がだめなら全部働かない設計、②蒸気発生器の不調だけでは停止しない原子炉のスクラム、③開き放しでしまらなくなりやすいパイロット・バルブの加熱器逃し弁への使用、その計器も故障中、④蒸気発生器や加圧器が炉と同じ高さ、⑤ＥＣＣＳ作働時に格納容器が密閉されない仕組み（だから格納容器から気密の悪い補助建屋へ放射能を（無謀にも）移せた？）・・・などかなりの点が指摘される。その上の事故発生後の処置の理解を越える拙さはすでにいくつか報道されているので省略するが、この発電所が三つの電力会社の共有財

産であつた点も、責任ある判断と措置という面で問題を感じさせる。

私は以上のことを冷静に受けとめた上で次のことを強調したい。原子力関係者はやはり今回の事故から日本の原発の安全性およびその対策へのあらゆる教訓を謙虚に徹底的にさぐるべきだということ、そしてその努力の中から真実のことを自信を持つて伝え、国民の信頼を回復するべきであるということである。

・行政知識の多さ

・化学的治療
△ monitoring
△ 防災

・減容する説明会 ― 演長は説明をまかせいる(責任)

原子力防災指定地域?
ヨウ素地域安定指定要個?
遠藤氏

(完全神話に対する説明
半径10回神話に対する 〃
〃 あれ以上のへまは絶対だめだ という説明